

# 因果と文脈の意味理論

清水雄也 (Yuya Shimizu)

一橋大学

事実的因果判断には「文脈鋭敏性 (context sensitivity)」がある。すなわち、或る因果主張が真であるか偽であるかという判断は文脈によって変化し得る。これは、現在の哲学的因果論において比較的広く共有された見解である。たとえば、飲めば飲むほど効く薬を〈飲まない、1錠飲む、2錠飲む〉という選択肢がある状況で、〈1錠飲む〉を選択した人の症状が治まったとする。このとき、〈1錠飲む〉が〈回復〉の原因であると言えるか否かの判断は文脈に依存する。その文脈において、〈1錠飲む〉のオルタナティブとして〈飲まない〉が想定されるならば〈1錠飲む〉は〈回復〉の原因だと判断され、〈2錠飲む〉が想定されるならば原因ではないと判断されるだろう。つまり、(A)「〈1錠飲む〉が〈回復〉を引き起こした (caused)」という1つの因果主張が、文脈によって真であったり偽であったりするように思われるのである。

このような現象を意味論的にうまく説明するために、どのような理論が必要だろうか。代表案の1つは、「対比主義 (contrastivism)」と呼ばれる立場である。対比主義は、対比という概念を導入した上で、因果関係を四項関係として理解することで、上述の問いに適切に答えることができると考える。ここで「対比」とは、因果主張の中で原因や結果として述べられている出来事の可能なオルタナティブ (のクラス) のことであり、「 $x^*$ ではなく (rather-than- $x^*$ )」という形で明示化される。対比主義の基本的な考え方によれば、因果主張は正確には「 $c^*$ ではなく  $c$ が  $e^*$ ではなく  $e$ を引き起こす」という主張であり、それが真であるのは  $c^*$ が  $e^*$ を反事実に含意するときである。上述のケースについて言えば、因果主張 A には (A')「〈飲まない〉ではなく〈1錠飲む〉が〈症状の継続〉ではなく〈回復〉を引き起こした」と (A'')「〈2錠飲む〉ではなく〈1錠飲む〉が〈症状の継続〉ではなく〈回復〉を引き起こした」という2通りの解釈があり、解釈に応じて真理値が異なる (A'は真、A''は偽) と考えることができる。こう考えれば、(A'とA''は別の主張であるから)「1つの主張が真であったり偽であったりする」という一見の謎は解消され、判断の変化を意味論的に説明することができる。だが、我々の通常の言葉遣いにおいて対比は用いられておらず、問題も滅多に起きていないように思われる。だとすれば、対比主義は、我々の言語実践を適切に捉えた意味理論とは言えないのではないだろうか。このような批判に対して、対比主義者は次のように答える。因果主張が通常は (不正確に) 二項関係として表現されているが、それほど問題を起こしていないのは、暗黙裡に言及されている対比が文脈上明らかである場合が多いからである。

このような対比主義の着想は、たしかに因果の文脈鋭敏性の問題をよく説明しているように見える。しかし、対比主義は文脈の問題を十分に解決できる理論ではない。このことは、対比主義が扱いきれないハードケースを見ることで明らかになる。たとえば、

或る航空機の墜落事故に関する記者会見で、責任者が「墜落の原因は重力です」と述べたとしよう。因果の標準的な理解にしたがって反事実的条件法で分析すれば、「〈(実際の) 重力の存在〉がなければ〈(当該航空機の) 墜落〉はなかった」は成り立つので、(B)「〈重力の存在〉が〈墜落〉を引き起こした」という因果主張は真だということになる。しかし、責任者の発言は明らかに馬鹿げているように思われる。ここで、因果主張 B の適切な対比主義的解釈が文脈上、(B')「〈重力の不在〉ではなく〈重力の存在〉が〈安全な運行〉ではなく〈墜落〉を引き起こした」という 1 通りに定まっているとしよう。これで問題は解決するだろうか。残念ながら、B' は我々の「馬鹿げている」という拒否反応を説明できない。むしろ、我々は B を聞いた時点で B' として解釈し、その上で B' を受け入れ難いものと感じるはずである。

また、次のようなケースも問題となる。サトシはカスミに頼まれ、彼女の長期外出期間中の植物管理を引き受けていたが、約束を守らず植物の世話を放棄して旅に出てしまった。そして、カスミが戻ったとき、彼女の大切な花はすべて枯れてしまっていた。後日、カスミがサトシに対して皮肉を込めて「何が原因で私の花は枯れてしまったのか」と尋ねると、意外なことにサトシは「タケシが仕事をしていたのが原因だ」と答えた。困惑するカスミに対し、サトシは次のように説明した。(C')「タケシが〈(カスミの植物の) 世話〉ではなく〈仕事〉をしていたことが、〈(カスミの植物の) 生存〉ではなく〈全滅〉を引き起こした」は真である、なぜなら、「タケシがカスミの植物の世話をしていれば、植物は生存していただろう」という主張が成り立つから。このケースは、対比主義によって解決できないばかりか、むしろ対比主義によってこそもたらされているように思われる。

以上 2 つのケースは、対比主義が解決できない因果の意味論的問題を提起している。これは、伝統的に「関連性の問題」として知られてきたトピックであるが、この問題は因果の「平等主義 (egalitarianism)」と呼ばれる構想に起因するものだと考えられる。平等主義は、結果が反事実的に依存するものをすべて平等に原因だと捉える考え方であり、それなりに広い支持を集めている。しかし、我々の日常的・科学的実践は平等主義的ではなく、また平等主義は因果概念の重要な役割を損ねてしまう。そこで、平等主義的ではない、より適切な意味理論を確立することが求められる。

本発表では、上述の背景の下、次の 3 点を明らかにしたい。第 1 に、因果の平等主義は事実に因果の構想として不適切であること。第 2 に、平等主義と関連性の問題は語用論的にではなく意味論的に説明されるべき問題であるということ。第 3 に、平等主義と関連性の問題を意味論的に解決するためには「モデル」の概念に訴えることが有効であるということ。現段階での結論は次のようにまとめられる。すなわち、因果主張の意味が持つ文脈鋭敏性は、対比ではなく、モデルによって分析されるべきである。